

琉球大学学術リポジトリ

フユレ神父の琉球滞在の記録

メタデータ	言語: 出版者: 国際地域創造学部国際言語文化プログラム 公開日: 2021-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 厚子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002011357

フュレ神父の琉球滞在の記録

宮里 厚子

はじめに

19世紀中葉に琉球に滞在したフランス人宣教師のなかで、ルイ・テオドール・フュレ (Louis Théodore Furet) 神父は最も長く滞在した人物である。1840年代にフォルカード神父はじめ3人の宣教師を琉球に派遣した後、パリ外国宣教会は1855年にようやく日本への足掛かりとなり得る琉球への宣教師派遣を再開させることができた。1855年から1862年まで5人の宣教師が滞在したうち、フュレ神父は1855年2月26日～5月8日、および1856年10月26日～1862年10月12日まで計6年3か月を琉球王国で過ごした。滞在期間中は宣教活動ができなかったこともあり、おもに宗教的な日課をこなし、語学の勉強をする以外に多くの報告書・手紙等の文書を残している。これらは香港の外国宣教会の上司であるリボワ神父や科学を教えていたサルト県プレシニエの小神学校の同僚や知人などに宛てられたものが多い。ここでは、フランシスク・マルナスの『日本キリスト教復活史』(久野桂一郎訳、みすず書房、1985)においてすでに紹介されている文書は避け、琉球滞在に対する思いや琉球王府との関係等についてフュレ神父のより個人的な考えが書かれた部分を特に翻訳し、紹介することを試みた⁽¹⁾。

1. 旅立ちの準備

フュレ神父が琉球派遣に際して知人や上司に送った手紙のなかから、琉球滞在に備えて準備した品について少し特殊な物を書いている部分を抜粋する。

(1) プレシニエ小神学校副校長ポマール神父宛て (1855年2月8日、香港にて) 友へ⁽²⁾

私が琉球に船出するのは今晚です。水の王国へと新たに冒険に出る前にあなたとすべての同僚に深い友情をこめて。私に、そして我々の難しい布教に思いを寄せてください。[…] さらに、私はあなたにかなり独創的なお願いをこれからします；あなたは笑うでしょうが、常軌を逸したことでないといわねえでしょう。パリから来た靴職人のキュロ氏に、大きなイタチ⁽³⁾の足のサイズを大事⁽⁴⁾にとっておいてくれないか尋ねてほしいのです。もし保存してあるなら、私のために良質な草履を6足ほど、きれいに包装してパリに送ってください。神学校が私に支払うべきお金で払っておいていただくといいでしょう。我々は法衣で過ごさなければなりませんし、もしかしたら近々派遣員として日本で何が起きているか見に行くことになるかもしれません。質のいい草履が必要なのです。それにもかかわらず、私は2週間後には中国人の作った（なめし皮でない）草履を履きつぶしそうです。したがって、プレシニエのものがより質がよく、それをお願いするのは筋道の通らないことではないでしょう。小さめより大きいものをお願いします。[…]

(2) 香港在外国宣教会会計係および日本伝道担当リボワ神父宛て（1855年3月1日、リオン号船上、那覇の錨地より）⁽⁵⁾

[…] 私はあなたに告白しなければなりません：私は欲に負け、ある物を買ってしまいました。その物の名前を言うだけにとどめれば、あるいは他の人からこのことを聞くことになればあなたは喜ばないでしょう。その物とは、カービン銃なのです！ああ、怖がらないでください、買う前によく考えましたし、ジラル氏やメルメ氏や他の人々同様、我々に害はないと確信しています。私はもちろんこれを我々の予算30ピアストルのなかから借り、自分のお金で買いました。友人たちから送られてくるプレゼントやお金でこれを返金するつもりです。

3ピエほどの長さしかないこのカービン銃は2つに分解でき、簡単に法衣の下に隠すことができます。[…]

これを買った意図は次の通りです：これを使って激しい音や騒音を立てずに鳥やフランスやパリでさえ重宝されている鳥や小動物を手に入れることができるでしょう。またこれらの獲物は銃の代金を賄い、我々の時間の節約にもなる

と保証します。さらに当局とうまくいく好機が来たら、私にはプレゼントとしてカービン銃があり、我々の宣教のための財産を使わなくても良いのです。ですから、これを購入したことであなたが私を責めるとは思っていません。[…]

2. 宣教師の日常

ここでは、琉球に落ち着いた宣教師たちがどのような日常を送っていたかやうかがい知ることのできる文書を紹介する。彼らは宣教活動が公式に許可されるまでは、日本での宣教に備えて語学の学習をすることが彼らの任務と理解し、琉球王府が派遣する中国語と日本語の教師たちと語学学習に励んだ。この語学教師たちとの関係を含め、琉球や日本では贈り物をしあうことがどれほど良好な関係を築くために重要かを説いているフュレの文書のほか、同時期に琉球に滞在したプロテスタント牧師モートンについての言及、滞在末期に単調な毎日について友人に愚痴をこぼす手紙などを紹介する。

(1) リボワ神父宛て (1855年4月25日)⁽⁶⁾

まとめると、我々はここが気に入っています。我々の辞書はコピーしてあります：これらで調べ、これらが概ねよく出来ていると喜んでいきます。ノートに記してある中国語の会話と同じ会話を練習していますが、これらと同じくらいよく出来ています。メルメ氏は、少々仕事熱心過ぎですが、すでに話し始めており、驚くべき才能です。

[…] 教師たちは2日に1度定期的に来てくれ、人のいい人たちです。私の中国語の会話はあまり役に立ちませんでした。

プロテスタントの牧師との我々の交流は、それほど頻繁ではありませんが、2, 3回、奥方と子どもを連れて訪問してくれました。しかし、それ以上は状況が許しませんでした。医師たちによると、彼は過度の仕事のせいで苦しみ、麻痺し、椅子に乗ってしか移動することができません。とにかく、彼らはとても親切です：彼らが[…]メルメ氏の不具合を知ったとき、持っているすべての薬を我々に使わせてくれ、お見舞いの手紙を送ってくれました。一昨日は受け取ったばかりの新聞を、自分たちが読む前に我々に送ってくれました。

(2) リボワ神父宛て (1857年1月12日～11月10日)⁽⁷⁾

条約⁽⁸⁾に反して、我々はもちろん監視されていますが、気に留めていません。ここに我々のことを知ってもらうためにいるのですから、将来のためにも我々のすべての行動を知ってもらうのは悪いことではないかもしれません。

親愛なるリボワ神父、当局とこれほど良好な関係にある我々を誉めてください。

それだけではありません。我々は教師を毎日 [派遣するよう] お願いしました。それは難なく許可されました。我々には日本語の本のために 6 人、中国語の本を琉球語に訳してくれるために 3 人います。これらの教師たちは品行方正で全般に親切です。彼らは本当にそれなりに見合った報酬を受け取るべきです。

[...] 我々は私が函館で買ったような孔子の本と似たようなものを板良敷本人⁽⁹⁾に 2 冊お願いしてあり、彼は島に同じようなものがないか見てみると約束してくれました。ついに 2 か月半後、やっと 1 冊見つけてくれましたが、3 ピアストル半も払わされました！

(3) パリ外国宣教会神学校長宛て (1857 年 1 月～ 11 月)⁽¹⁰⁾

贈り物に関して、上層部に知らせる機会があるのでしたら、ここでは、そして日本では、贈り物なしに交渉をすることは、特に自分が受け取ったときは、礼儀を知らないということになると知らせてください。したがって、あなたの指摘によって、こちらの国に来る船の指揮官たちが自由に使えるような贈り物を政府が準備することは、我々の意見では、大切な祖国への助けになることでしょう。

(4) リボワ神父宛て (1857 年 8 月 22 日)⁽¹¹⁾

現在まで、我々には親切で、本人たちの言うには義務を果たすために熱心な教師たちがいます。我々が現在持っている小さなお茶の箱以外は、報酬として彼らに何も渡していません。この寛容な人々に何かを送ることができればいいと、我々 3 人は考えています。それぞれの教師に美味しいお茶の箱 (1～1.5 キロ) と 5～6 つのティーカップが妥当なプレゼントだと思います。しかしながら、数人の教師は他の者より頻繁に来ます。彼ら (6 人ほど) には半キロから 1 キロのお茶を足すのも悪くないでしょう。もし他により良い案があればお

知らせ下さい。やがて3年になろうというところで、教師の数は28人に上っており、複数の者はおそらく近いうちに変わるかもしれません。ですから、30から40人分は必要でしょう。

[…]

我々は野菜と花を植えた小さな庭を持っています。何か美味しいもの、栽培するための何かを送ってくれれば助かります。複数のシンシーたち⁽¹²⁾が我々の国の種を求めるので、送っていただけるとなおさら助かります。

(5) リボワ神父宛て (1858年10月23日)⁽¹³⁾

それから、私はあなたに我々3人の名義で重要なお願いをしました。教師たちへの支払いについてです。今年まで、王府は我々が支払うのを欲していませんでした。我々は1.5, 2, 2.5キロの美味しいお茶を約40箱と半ダースほどのティーカップを同量お願いしていました。しかし少々変更がありました。王府は、我々の艦船が来るときに教師たちに小さな贈り物をしていいと公式に返事をしたのです。我々はピアストルを試してみました。出納帳を見ておわかりのように、これは断られませんでしたが；ただ、王府は教師たちに、お返しとしていつも贈っている物より価値のある贈り物をするように強制しました。

(6) ポマール神父宛て (1860年5月28日～7月6日)⁽¹⁴⁾

ああ全く！フュレ神父は宣教師なのにめんどりみたいにつまらないことを話しています！友よ、新聞も雑誌も印刷されず、今日起こることは昨日もその前も起こったことであり、人の多い町の真ん中の砂漠のように大陸とも日本とも交流もなく我々が生きているこの小さな琉球の国で、どうか何か話題を見つけてください。

3. フュレ神父の方策

フュレ神父は、琉球王府と良好な関係を築き、宣教活動をするのに十分な語学力をつけながら時機が来るのを待つのが得策であると考えていたことがその手紙等からうかがえる。また、琉球に少しでも宣教活動の結果を残したかったということのほか、語学学習に恵まれた場所として、日本が開港した後も琉球での宣教活動を維持しようと上司に手紙で訴えていたことがわかる。

(1) リボワ神父宛て (1858年10月28日)⁽¹⁵⁾

[…] 何につけ「条約、条約！」とは言うべきでないという親愛なるムニク一氏と私のやり方はメルメ氏には合わないようです。ジラール氏もメルメ氏と同じ考えでした。しかしながら、彼は少しずつ我々のように考えるようになっていき、出発の時には、我々が欲するものすべてを […] 容易に手に入れるのを見て、今年 [琉球王府側から] 文句がなかったのはおそらくそのせいかもしれないとの意見に至っていました。

第一に、隠さずに言わなければなりません、我々は琉球の人々の意のままにあるのです。 […] また、率直に言って、これらの人々はヨーロッパにおいて模範になるような礼儀正しい人々です。例えば、リボワ神父、2日前に船が1時に出発しました。数時間後に、ジラール氏と2人の使用人の出発を知った総理官は我々の先生に、「あの方たちが望むなら、授業をしてくさい。そして友人と使用人との別れから来る辛さには私がどれほど同情しているか伝えるように」と言ったそうです。その後、1人の通訳が使用人を1人連れてきて、また同じようなことを言ってくれました。

翌日(昨日)は、今や度支官になり、やがて大臣にもなるであろう琉球の仕切り屋 [板良敷朝忠] もまた半マスのお菓子を持って慰めを告げに来ました。彼は、時々フランスの艦船を見るのも嬉しいし、このように交渉するのもいいものだと言っていました。

(2) リボワ神父宛て (1859年6月29日)⁽¹⁶⁾

[…] 親愛なるリボワ神父、あなたのように、複数の理由から琉球をあきらめることは困難だとみなします。間違っているかもしれませんが、我々に日本語を教えてくれた彼らに神が報いを与えるのも近い、我々の教師たちのうちの数人のようにまっすぐで廉直な人々を永遠に滅びさせることはないという考えをしています。さらに、我々の宣教会長がその手紙のなかで我々のうち1人だけを [日本に] 連れていくと伝えていました。そのことは我々を安堵させますが、1人孤独に、差し迫って必要となったときに魂の救済を求めることもできずに [琉球に] 残される者のことを考えると恐ろしくもあります。したがって、もしあなたがこの手紙を同僚たちが日本へ出発する前に受け取った場合、

会計事務局に誰か若い宣教師がもしあれば、どうか、その人を〔琉球から〕立ち去る者のかわりに送ってくれるようあなたの権限をお使いください。

(3) パリ外国宣教会神学校長アルブラン宛て（1859年6月30日）⁽¹⁷⁾

日本におけるポストに配置するために神学校長様は我々のうちの1人を指名することでしょうから、日本への複数の宣教師を見つけることができなかったことは残念です。私はこちらに1人孤独に残される者に同情します。〔…〕それに、日本で肯定的なことがあるまで勉強するためには琉球以外に恵まれた場所は見つからないでしょう。日本では教師を得られる有利な状況はおそらくないでしょう。

(4) 在上海、中国ラザリスト宣教会会計係エムリ神父宛て（1862年10月30日、横浜にて）⁽¹⁸⁾

我々の上司は琉球における将来の希望を全く見出せず、外国人に開かれた港のうちのひとつで働くために我々を日本に呼び寄せることを決めました。おそらく長崎になるでしょう。我々の在日フランス大使は我々を那覇で迎えここに連れてくるために、美しいフランスの蒸気船デュブレックス号を派遣しました。

福音のために私が琉球当局に公式の請願をし、孔孟（孔子と孟子の思想）で自分たちには十分足りていると言ってはっきりと断われたということはおそらくご存じでしょう。しかしながら当局は外見的には我々に対して最後まで常にとても礼儀正しかったのです。彼らの最後の行為は、我々が家の購入のために支払ったお金全額を返しに来るというものでした…。しかし、島民たちが我々を無償で住ませたと言うだろうと思ったので、一部だけ受け取りました。

我々は確かに本当の国外追放者のようでしたが、撤退し、キリスト教徒になるために少なくとも外見はほぼ何も変わらなかったこの善良な国民を見捨てるのは悲しいことです〔…〕。

注

(1) 本稿におけるフュレ神父の文書は、フランス社会科学高等研究院名誉教授

パトリック・バイヴェール氏が翻刻したものを利用した。

- (2) ル・マン教区古文書
- (3) フュレ (Furet)はフランス語で「イタチ」を意味することから。
- (4) 本文中のイタリック体はフュレによるもの。
- (5) パリ外国宣教会古文書局資料 No.569, pp. 191-193.
- (6) *ibid.*, pp. 224-226.
- (7) *ibid.*, pp. 377-383.
- (8) 1855年にフランスと琉球王国との間で署名された琉仏修好条約のこと
- (9) 琉球王府の通事、板良敷(牧志) 朝忠.
- (10) *ibid.*, pp. 1132-1147.
- (11) *ibid.*, pp. 365-368.
- (12) 宣教師たちは教師のことを琉球の言葉でシンシー「先生」と呼んでいた。
- (13) *ibid.*, pp. 432-432 (4).
- (14) ル・マン教区古文書
- (15) パリ外国宣教会古文書局資料 No.569, pp. 436-439.
- (16) *ibid.*, pp. 537-543.
- (17) パリ外国宣教会古文書局資料 No. 568, pp. 1267-1273.
- (18) パリ外国宣教会古文書局資料フュレ関連文書.